

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第5章「命」

四

「正門、毎時1万1930発射1。」

3月15日午前9時すぎ、福島第一原

発免震重要棟の緊急時対策本部に保

安班員の声が響いた。2号機圧力抑

制室の異常と4号機建屋の爆発がほ

ぼ同時に起き、構内の放射線量が上

昇していた。正門付近で計測された

数値は事故後の屋外最高値だった。

だが構内が高線量であっても、原

子炉に海水注入を続けている消防車

の燃料を切らすわけにはいかない。

構内に残った人間にできることはい

えば、注水継続と原子炉の監視しか

ないのだ。

復旧班には、第1班長稲垣武之

(47)や第2班長奥田史朗(56)ら6人

が残っていた。

## ここが墓場か……



# 「4号機から火災」

「全滅してもいい。絶対に引けな

いと。そんな決意でした」。稲垣

昌郎(56)に報告した。火元は不明だ

が。次から次へと起きるトラブルが構

内に残った者たちを追い詰めてい

た。この時、対策本部にいた東京電

力自衛消防隊副隊長の新井知行(42)

は、露出した燃料が大気中に放射線

を放出し続ける。

ましたね。僕が一番精神的にきつ

かったところですよ」

だが全ての状況が悪かったわけで

はない。2号機原子炉には水が入っ

ていくようになっていた。正門付近

の線量も下がり始めていた。

まだできる…。

吉田はあきらめてはいなかった。

午前9時39分、テレビ会議で吉田

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同

通信 高橋秀樹)

「お、おい、あれ…」

4号機建屋の4階北側付近から真

線量だった。

約1時間前には、2号機原子炉建

屋東側のグロウアップパネルと呼ば

れる大きな開口部から白煙が出てい

るのが確認されていた。

次から次へと起きるトラブルが構

内に残った者たちを追い詰めてい

た。この時、対策本部にいた東京電

力自衛消防隊副隊長の新井知行(42)

は、露出した燃料が大気中に放射線

を放出し続ける。

ましたね。僕が一番精神的にきつ

かったところですよ」

だが全ての状況が悪かったわけで

はない。2号機原子炉には水が入っ

ていくようになっていた。正門付近

の線量も下がり始めていた。

まだできる…。

吉田はあきらめてはいなかった。

午前9時39分、テレビ会議で吉田

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同

通信 高橋秀樹)

景が現れた。

坂を下っていくと、右手に異様な光

で業務車に乗って、3号機西側の

全面マスクを装着し、同僚と2人

も近づけない。

天井も壁もない。そんなればもう誰

か言った。消火活動に回せる消防車

小型の無人飛行機が撮影した福島第  
1原発の2号機(2011年3月20  
日エフ・ネット・サビエ提供)